

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 7 年度病虫害発生予報第 6 号 (9 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 6 号を発表したので送付します。

予報第 6 号

イチゴ炭疽病に注意しましょう

8 月 9 日から 12 日にかけての大雨により、イチゴ炭疽病の多発が懸念されます。薬剤防除を徹底するとともに、下図のような炭疽病が疑われる株の処分をしっかりと行ってください。また、低温処理にあたってはなるべく健全な株を選別して入庫するようにしてください。



薄墨色の初期病斑



黒色の陥没病斑

イチゴ炭疽病の典型的症状

9 月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現 況 (発生量)	9 月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稻 (普通期)	いもち病 紋枯病 トビイロウンカ 斑点米カメムシ類	並 並 少 やや多	並 やや多 少 多	並 やや多 並 やや多

作物名	病害虫名	現 況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	少 やや多	やや少 やや多	少 やや多
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	並 やや多	並 やや多	並 多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや多 少 多	やや多 少 多	やや多 並 やや多
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ他)	少 ³⁾	— ³⁾	少 ³⁾
イチゴ	炭疽病 ハダニ類	やや多 少	やや多 並	やや多 並
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	やや少 やや多 並	やや少 やや多 やや多 ⁴⁾	少 並 やや多
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	やや少 並 並 やや多 多 やや少 並 並	やや少 並 並 多 多 やや少 並 並	やや少 並 並 並 多 やや少 並 並

注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、
「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

注 3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。

注 4) 野菜共通・オオタバコガ及びコナジラミ類において、調査年が10年に満たない場合は調査地点の調査開始年～2024年までの平均値を平年としています。

<予想される向こう1か月の天候（令和7年8月30日～9月29日）>

6月中旬以降、暖かい空気に覆われ、気温の高い状態が続いています。向こう1か月の気温も、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。太平洋高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の日照時間は平年並みか多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並10 高80% 平年より高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

（福岡管区气象台 令和7年8月28日発表1か月予報より抜粋）

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>
または右QRコード①

①⇒



○X（旧Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Xの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②

②⇒



【普通作物：水稻】

1 いもち病（穂いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

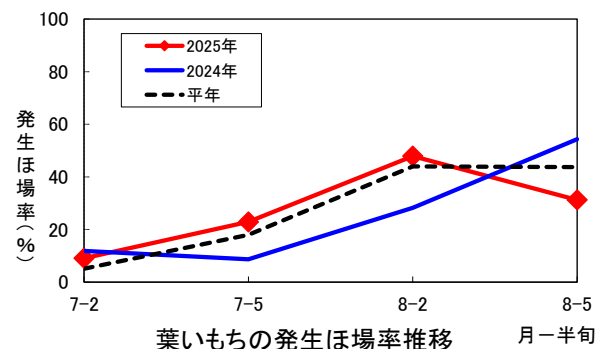
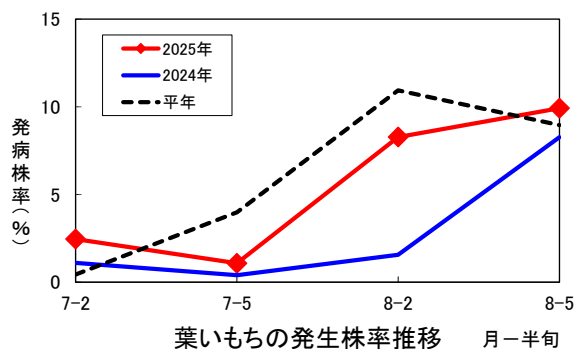
（2）予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、葉いもちの発生量は平年並であった（±）。

（葉いもち）発病株率 9.9%（平年 8.3%、前年 8.9%）

発生ほ場率 31.3%（平年 43.7%、前年 54.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 使用農薬は「令和7年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

イ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

（1）予報の内容

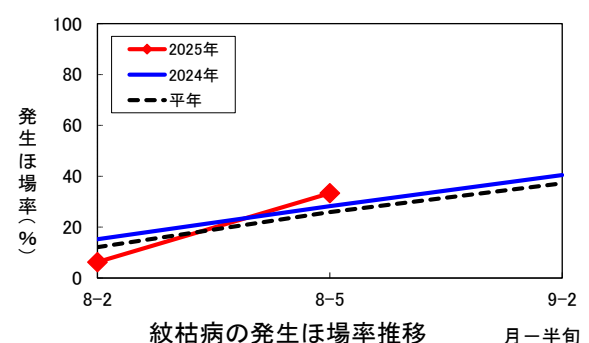
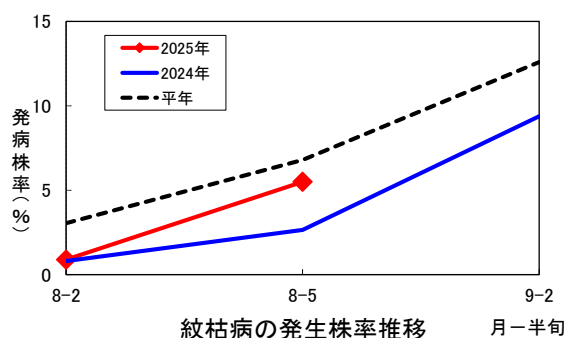
発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 5.5%（平年 6.8%、前年 2.7%）

発生ほ場率 33.3%（平年 25.9%、前年 28.3%）



イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 密植や多肥栽培ほ場、昨年多発した場などでは発病しやすい傾向があるため、発病が認められたら早めに防除を行う。

イ 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は補正防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

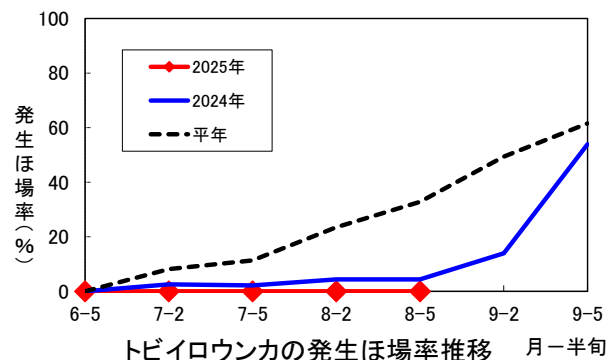
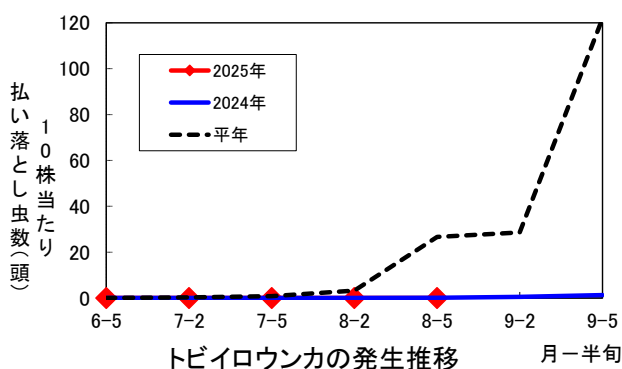
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10株当たり払い落とし成虫数 0頭（平年 26.7頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率 0%（平年 32.8%、前年 4.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は、地域及びほ場による発生の差が大きく、世代を経るごとに急激に増加する。ほ場における発生状況を把握し、発生が多い場合は幼虫期に防除を行う。

福岡県の要防除水準：払い落とし調査によるトビイロウンカ中老齢幼虫の合計数

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

9月末：100株当たり 1000頭以上

イ 県内5か所の予察灯では、8月7日から8月13日までの期間に、トビイロウンカの誘殺が複数回確認されており、8月10日頃に飛来があったと推察される（病害虫発生予察技術情報第6号「海外飛来性害虫の発生状況」参照）。そのため、収穫時期が10月中旬以降となる中～晩生品種では、10月上旬中旬に第二世代幼虫が発生すると予測され、多発すると坪枯れ等の被害が発生する恐れがあるため注意する。

ウ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月4半旬の誘殺虫数は、平年より多かった（＋）。

- ・ 主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホリカメムシ、シロカメムシ）98頭（平年 43.7頭、前年 75頭）

- ・ ミナミアオカメムシ 901頭（平年 291.9頭、前年 463頭）

- ・ アカスジカスミカメ 807頭（平年 736.3頭、前年 704頭）

- ・ イネカメムシ 2,017頭（平年 293.8頭、前年 1,069頭）

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

- ・ 主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホリカメムシ、シロカメムシ）

20回すくい取り虫数 0.04頭（平年 0.6頭、前年 0.67頭）

発生ほ場率 4.2% (平年 22.9%、前年 37.0%)

- ・ ミナミアオカメムシ

20 回すくい取り虫数 0.06 頭 (平年 0.1 頭、前年 0.04 頭)

発生ほ場率 6.3% (平年 2.7%、前年 2.2%)

- ・ アカスジカスミカメ

20 回すくい取り虫数 0 頭 (平年 0.6 頭、前年 0.1 頭)

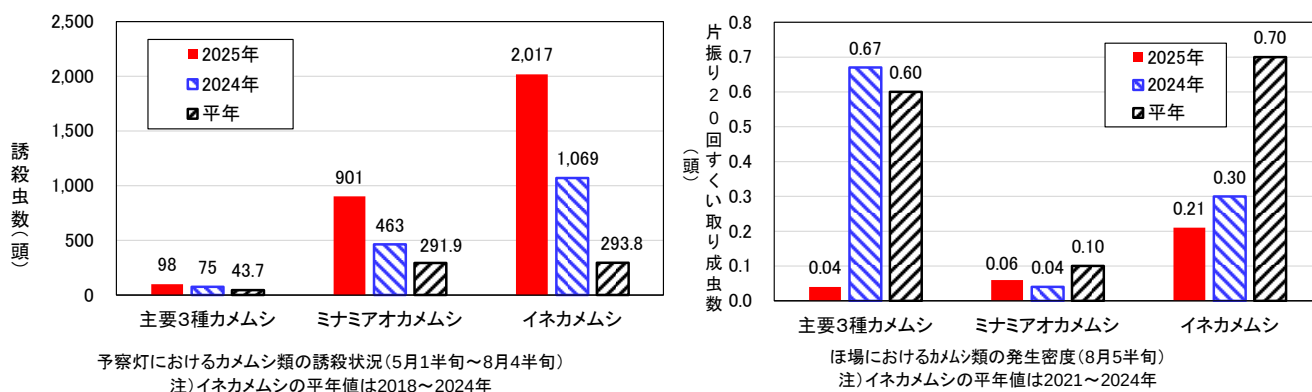
発生ほ場率 0% (平年 12.8%、前年 10.9%)

- ・ イネカメムシ

20 回すくい取り虫数 0.21 頭 (平年 0.7 頭、前年 0.3 頭)

発生ほ場率 14.6% (平年 16.0%、前年 21.7%)

ウ 向こう 1 か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。



* 1 県内 5 か所 筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荏田町 (みやま市、荏田町は本年より移転)

* 2 主要 3 種カメムシは、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシの合計頭数

(3) 防除上注意すべき事項

ア イネカメムシを除く斑点米カメムシ類の防除時期は穂揃い期とその 7～10 日後の 2 回である。ほ場での発生状況に留意し、発生が多い場合は薬剤防除を行う。

イ イネカメムシは、出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂期とその 7～14 日後で、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。また、周囲より出穂が早いほ場では、出穂期に集中的に加害を受けると不稔穂が発生し、収量に影響するため特に注意する。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

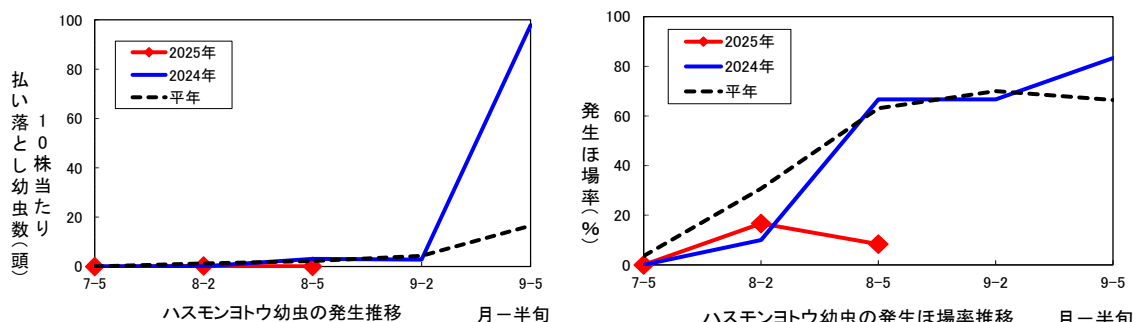
発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8 月 5 半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。

10 株当たり払落とし幼虫数 0.1 頭 (平年 2.2 頭、前年 3.1 頭)

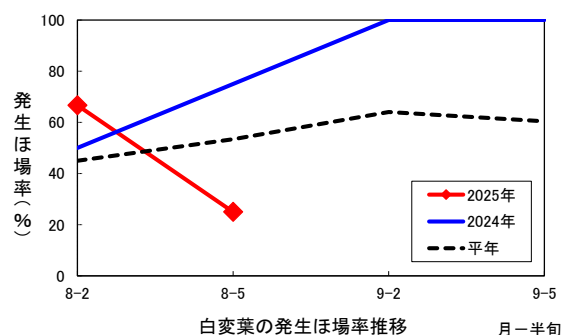
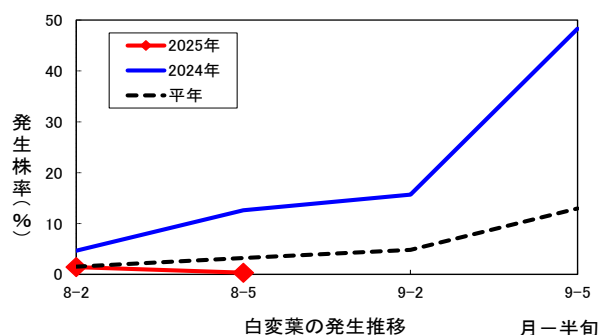
発生ほ場率 8.3% (平年 63.1%、前年 66.7%)



イ 8月5半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年より少なかった（－）。

白変葉発生株率 0.3%（平年 3.2%、前年 12.6%）

発生ほ場率 25.0%（平年 53.4%、前年 75.0%）

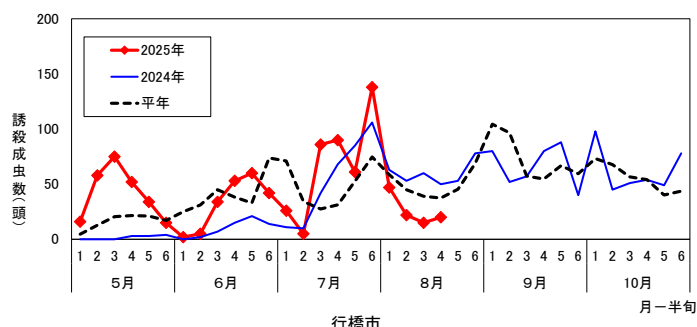
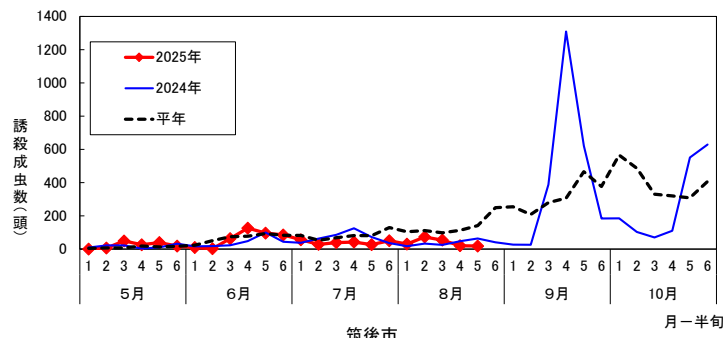
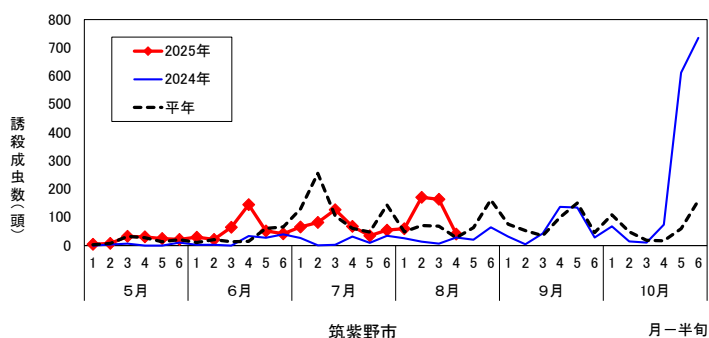


ウ 8月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は平年よりやや少なく推移した（－～±）。

筑紫野市 436頭（平年 294頭、前年 76頭）

筑後市 177頭（平年 425頭、前年 122頭）

行橋市 104頭（平年 180頭、前年 226頭）



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数

エ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>

イ 食害による減収量が大きいのは開花期7～20日頃（8月下旬～9月上旬）であるので、この時期の防除が重要である。この時期に白変葉が多い場合は直ちに防除を行う。

ウ フェロモントラップの誘殺数が急増したら、ほ場のハスモンヨトウや白変葉の発生状況を観察して防除の要否を決定する。

エ 一部の薬剤で、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月4半旬の誘殺虫数は平年より多かった(+)。

誘殺虫数 901頭(平年 291.9頭、前年 463頭)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10株当たり払落し虫数 0頭(平年 0.05頭、前年 0頭)

発生ほ場率 0%(平年 3.5%、前年 0%)

・ホソヘリカメムシ

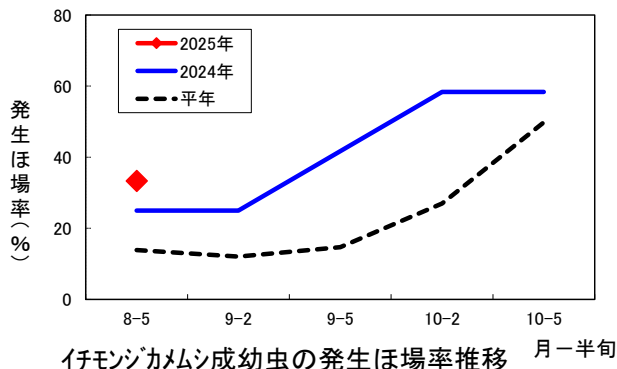
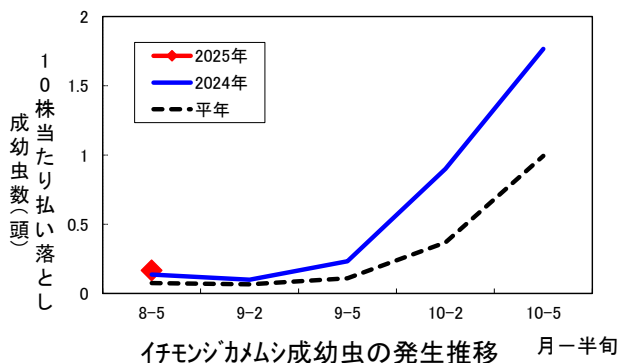
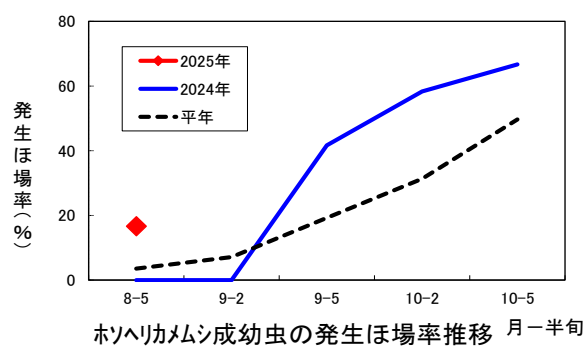
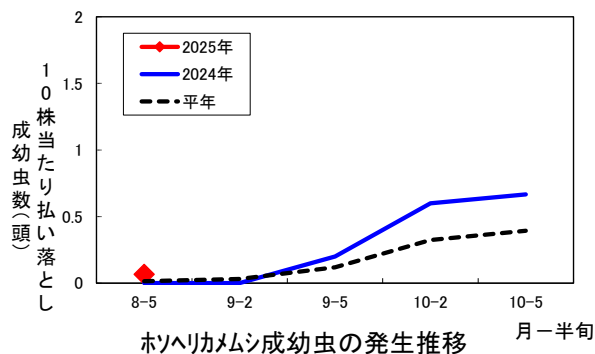
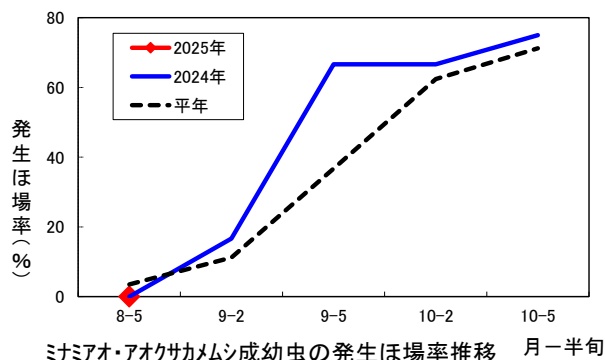
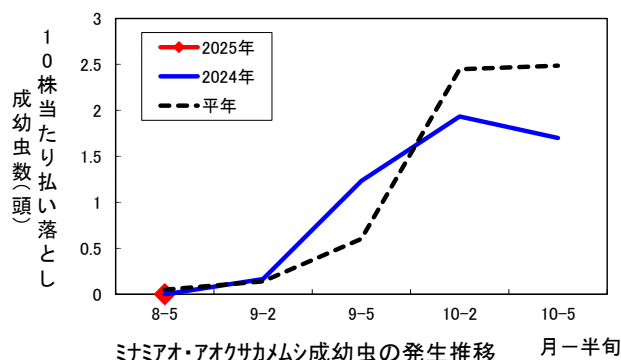
10株当たり払落し虫数 0.1頭(平年 0.01頭、前年 0頭)

発生ほ場率 16.7%(平年 3.6%、前年 0%)

・イチモンジカメムシ

10株当たり払落し虫数 0.2頭(平年 0.1頭、前年 0.14頭)

発生ほ場率 33.3%(平年 13.9%、前年 25.0%)



ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は開花期後30日前後(例年9月中～下旬)であるが、多発生の場合はその7～10日

後に2回目の防除を行う。

イ カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除を心掛ける。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

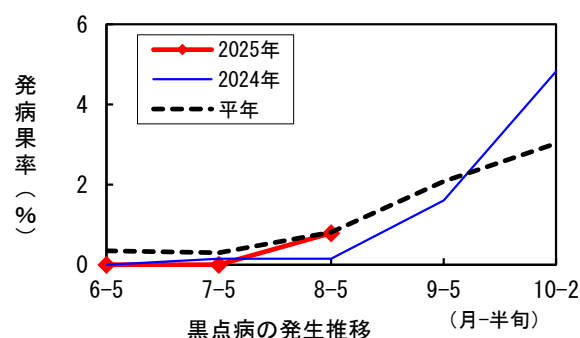
発病果率 0.79% (平年 0.81%、前年 0.15%)

発生ほ場率 36.4% (平年 29.1%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量はやや多かった(±~+)。

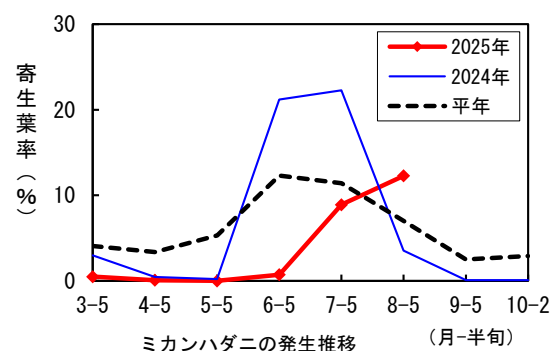
寄生葉率 12.3% (平年 7.5%、前年 3.5%)

発生ほ場率 63.6% (平年 50.8%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は発病枝率でやや多く、発病果率で平年並であった(±~+)。

発病枝率 0.85% (平年 0.18%、前年 0.24%) 発生ほ場率 45.5% (平年 10.8%、前年 27.3%)

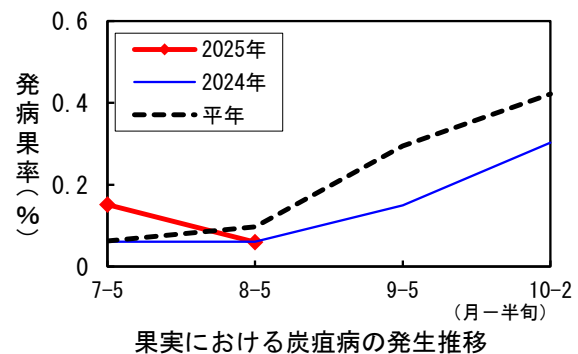
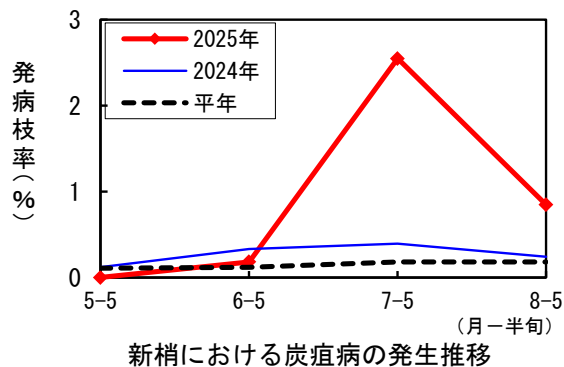
発病果率 0.06% (平年 0.10%、前年 0.06%) 発生ほ場率 18.2% (平年 10.9%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果、台風等による傷果は見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園や、日焼け果の多発園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

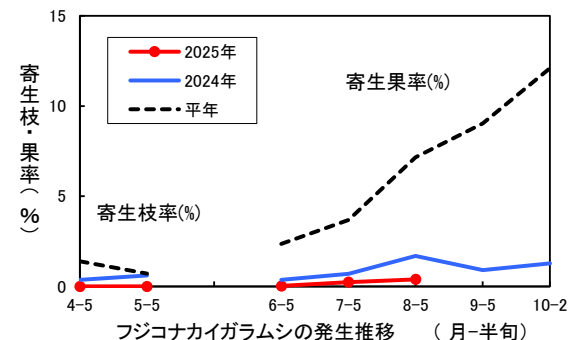
寄生果率 0.4% (平年 7.2%、前年 1.7%)

発生ほ場率 54.5% (平年 71.7%、前年 45.5%)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

被害果率 2.1% (平年 0.5%、前年1.3%)

発生ほ場率 81.8% (平年 40.7%、前年81.8%)

イ 第2～3世代と考えられる7月1半旬

～8月5半旬のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、うきは市でやや多く、八女市では平年並であった(±～+)。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 456 頭 (平年 276 頭、前年 292 頭)

<八女市> 492 頭 (平年 626 頭、前年 1397 頭)

：チャハマキ <うきは市> 1 頭 (平年 4.5 頭、前年 0 頭)

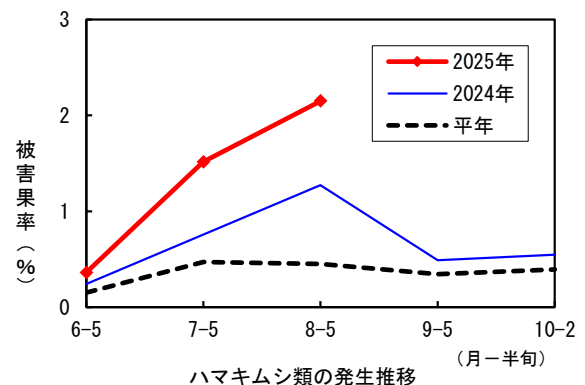
<八女市> 0 頭 (平年 29 頭、前年 7 頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

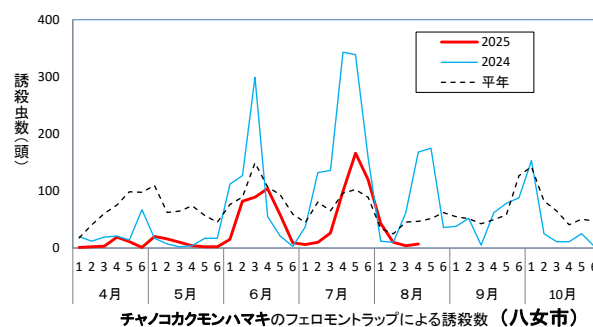
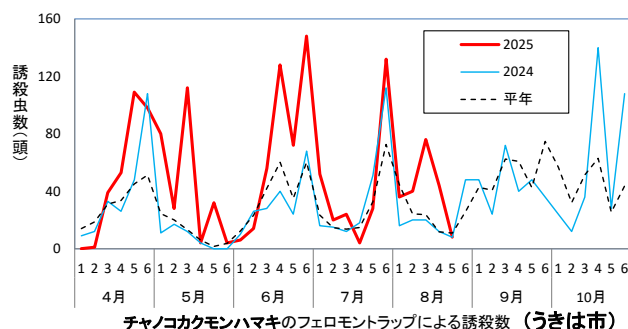
(3) 防除上注意すべき事項

ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いので、卵から成虫まで多様な齢期の個体が混発している。園内の発生状況を確認し、発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期に防除するように努める。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよ



う十分量の薬液を丁寧に散布する。



フェロモントラップにおけるチャノコカクモンハマキの誘殺数

【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ他）】

(1) 予報の内容

発生量：多発した前年より少、過去10年間との比較では少

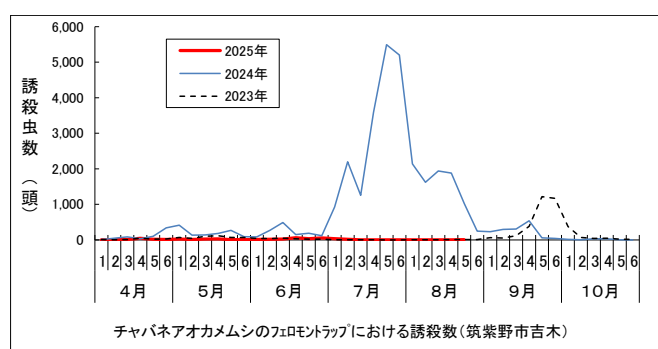
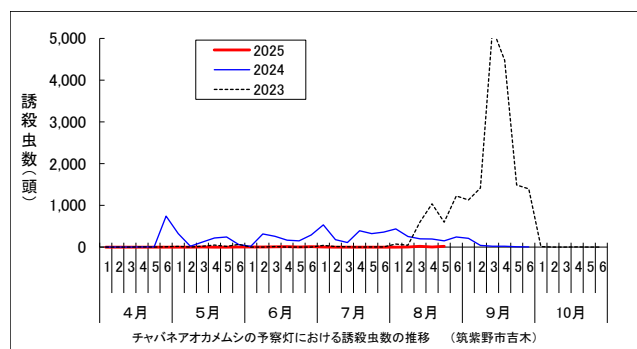
果樹園飛来時期：ヒノキ樹からの離脱は9月中旬以降

(2) 予報の根拠

ア 県内各地の予察灯・フェロモントラップによる誘殺数は少なかった（一）。

※ 筑紫野市以外の地域の詳細他、下記ホームページのデータも参照

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>



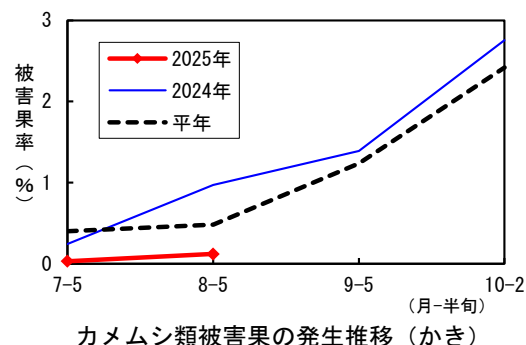
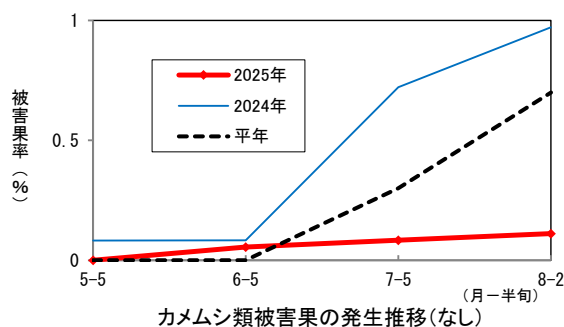
イ 8月2半旬及び5半旬調査の結果、なし及びかきでの被害果率は前年・平年よりやや少なかった（一〜±）。

なし（8月2半旬）被害果率 0.11%（前年 0.45%、平年 0.54%）

発生ほ場率 22.2%（前年 34.5%、平年 54.5%）

かき（8月5半旬）被害果率 0.12%（前年 0.97%、平年 0.48%）

発生ほ場率 27.3%（前年 63.6%、平年 27.8%）



ウ 8月5半旬のヒノキ球果ビーティングによる果樹カメムシ類の成幼虫捕獲虫数は、前年よりやや多く、平年よりやや少なかった（一〜±）。

1 地点当たりの平均捕獲成幼虫数：4.4頭（前年 2.7頭 平年8.4頭）

※ 詳細は下記ホームページのデータも参照

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>

エ 8月5半旬の14調査地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数及び被害球果率は、前年より少なかった。新世代成虫のヒノキからの離脱予測時期目安（25本）に達するのは前年・平年よりやや遅く、9月中旬以降と予測される。

1 地点当たりの1球果口針鞘数：4.6本（前年 14.4本）

朝倉地域：4.4本/果 久留米地域：8.0本/果

筑後地域：4.6本/果 県北地域：2.6本/果

被害球果率：71.9%（前年 99.6%）

※ 詳細は下記ホームページのデータも参照

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>

オ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。予察灯・フェロモントラップ・ヒノキ球果被害果率については、下記ホームページを確認し、最寄りの調査定点のデータを参照。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

カ 今後の発生状況等については、病虫害防除所ホームページを参照する。

<<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>>

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

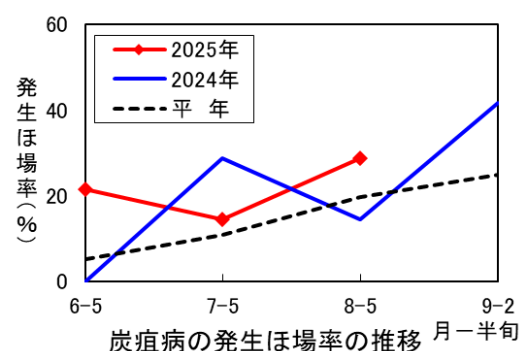
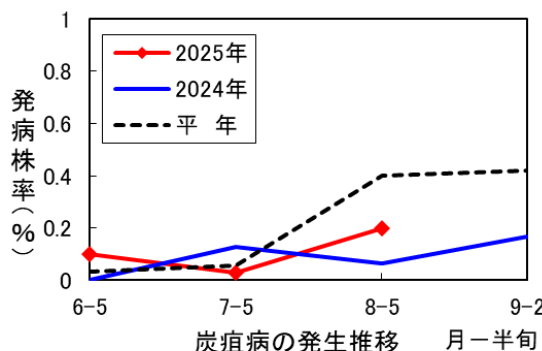
（2）予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発病株率は平年並で（±）、発生ほ場率は平年より多かった（+）。

発病株率 0.2%（平年 0.4%、前年 0.1%）

発生ほ場率 28.6%（平年 19.7%、前年 14.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に感染が拡大することがある。ほ場をこまめに見回り、発病株やその周辺株を速やかに持ち出し処分することで、発病の拡大防止に努める。

イ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け、風通しをよくする。

- ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。
- エ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を徹底する。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、薬剤散布を行う際は同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、健全苗を選び、入庫する際は、過湿を避けるため苗を詰めすぎないように注意する。

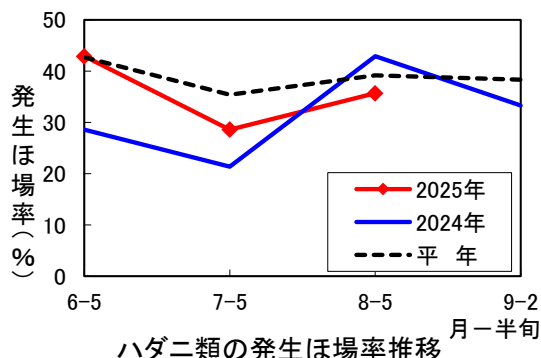
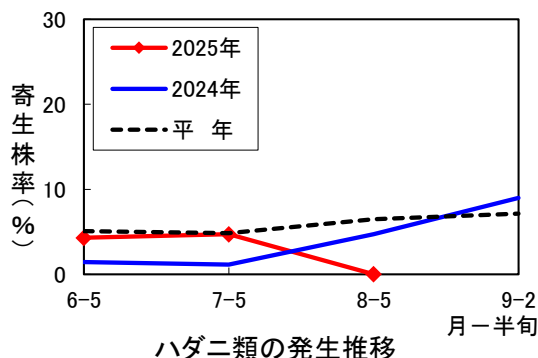
2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
寄生株率 0.02%（平年 6.5%、前年 4.7%）
発生ほ場率 28.6%（平年 39.2%、前年 42.9%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。
- ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- エ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。
- オ ハダニに登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- カ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ぽにハダニ類を持ち込まないようにする。

【野菜：野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

- ア 8月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は平年よりやや少なく推移した（－～±）（「普通作物：大豆」の項参照）。
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら速やかに防除を行う。
- イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。<<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>>

2 オオタバコガ

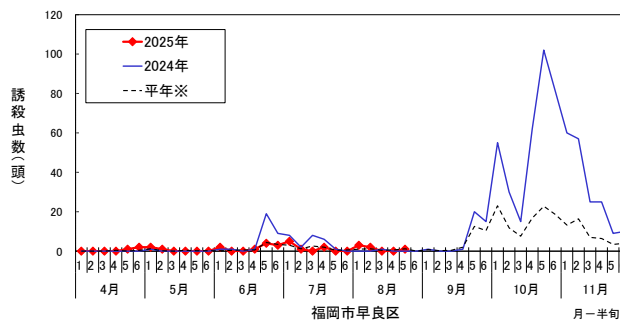
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年並

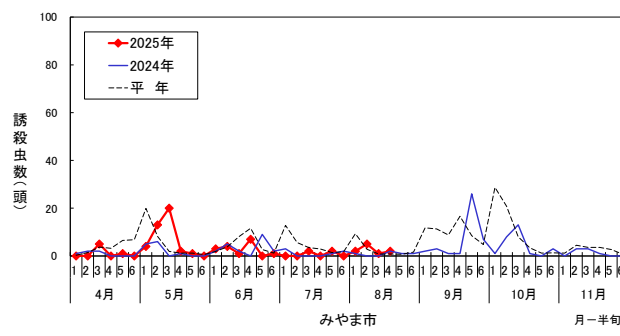
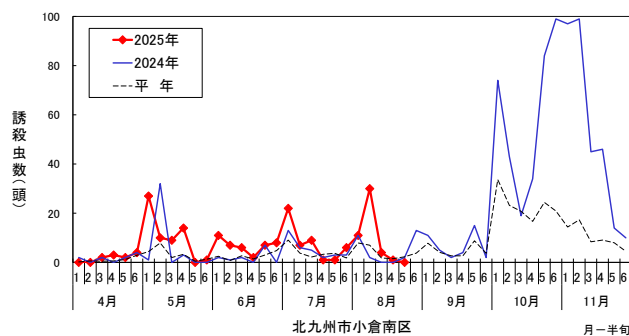
(2) 予報の根拠

ア 8月1半旬～3半旬までのフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年よりやや多く推移した(±～+)。

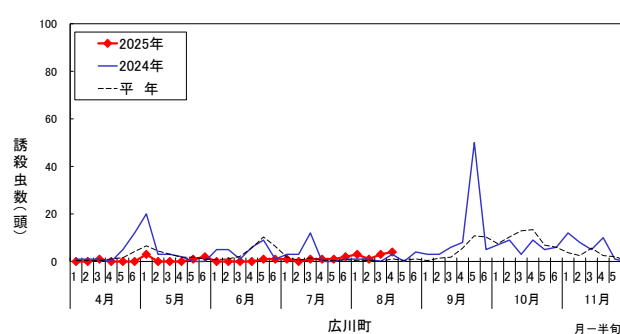
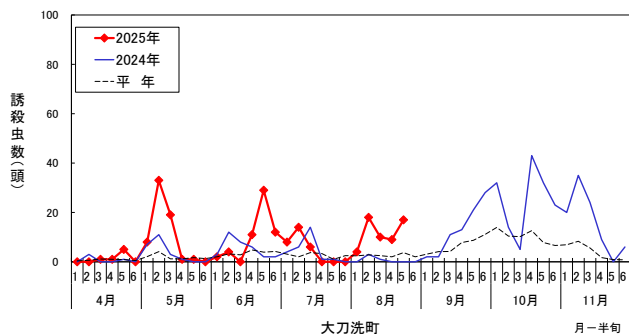
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



※2020年からの調査のため平年値は過去5年の平均を示す。



※2023年から調査地点を2km移動



※2024年から調査地点を3.6km移動

フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら速やかに防除を行う。

イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。<<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#yasai>>

3 コナジラミ

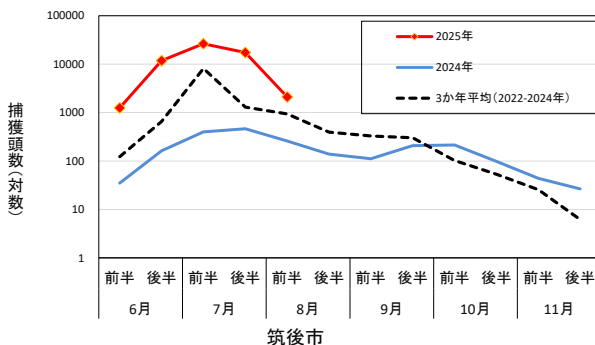
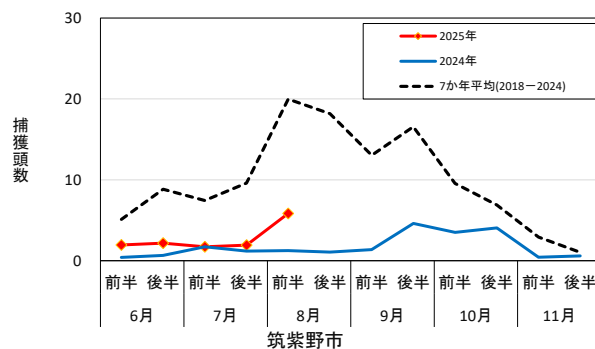
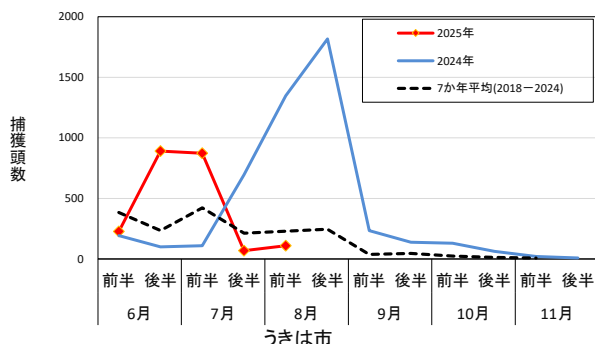
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月後半～8月前半の粘着板トラップにおける捕獲虫数は地域によって異なり、一部地域では多発しているが、おおむね平年並であった（±）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



黄色粘着板におけるコナジラミ類の捕獲頭数

注) トマトハウス周囲4か所に設置した黄色粘着板に捕獲された虫数の合計

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら速やかに防除を行う。

イ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

ウ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

エ 早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。

オ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ばへの持ち込みを防ぐ。

カ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

キ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。<<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#yasai>>

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

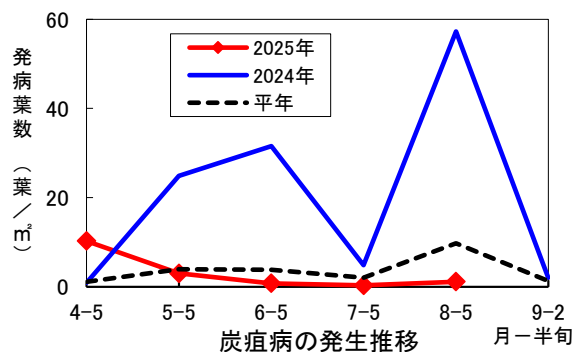
発病葉数 1.1 葉（平年 9.8 葉、前年 57.3 葉）

発病ほ場率 66.7%（平年 59.1%、前年 88.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、秋芽での発生に注意し、4～5葉期の防除を行う。



イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

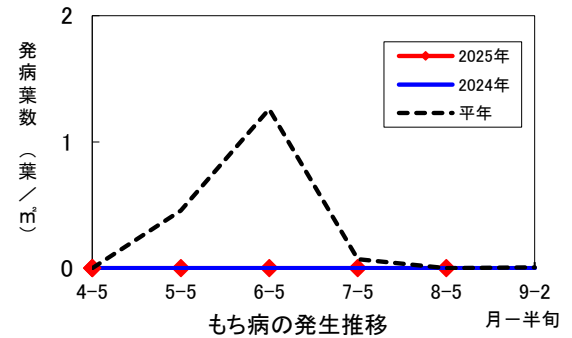
発病葉数 0葉 (平年 0葉、前年 0葉)

発病ほ場率 0% (平年 0%、前年 0%)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋芽生育期に降雨が多いと、感染・発病しやすくなる。

イ 今年、多発した園では、萌芽期の防除を徹底する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

50葉当たり虫数 4.8頭 (平年 4.7頭、前年 5.9頭)

発生葉率 3.6% (平年 3.7%、前年 3.6%)

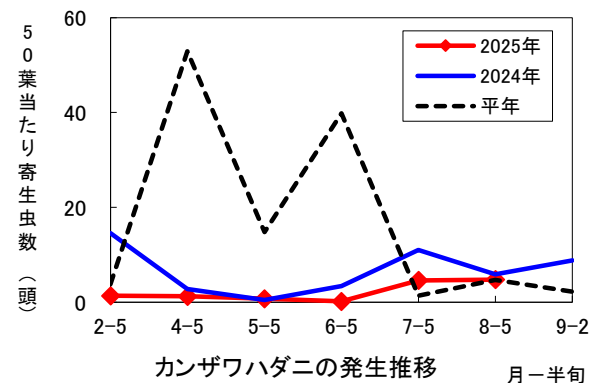
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の茶園では、多発する前に速やかに防除を行う。

イ 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

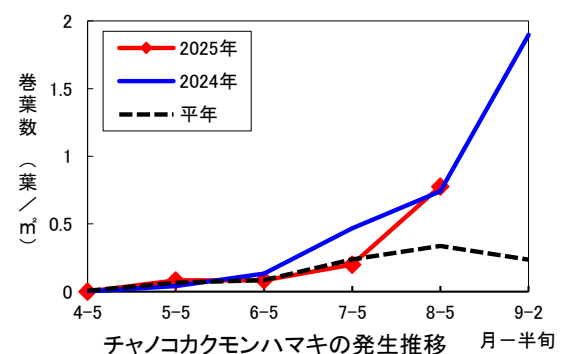
1㎡当たり葉巻数 0.8葉 (平年 0.3葉、前年 0.7葉)

発生ほ場率 44.4% (平年 29.2%、前年 10.0%)

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7~10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

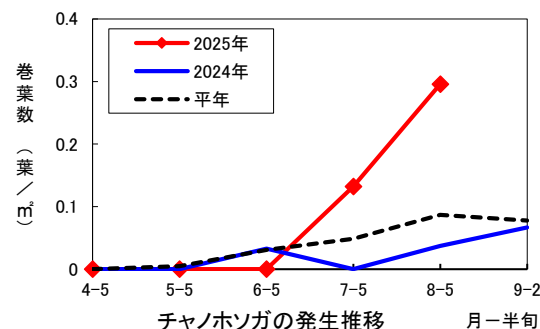
1㎡当たり葉巻数 0.30 葉(平年 0.09 葉、前年 0.04 葉)
発生は場率 22.2% (平年 15.7%、前年 30.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7～10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量はやや少なかった(ー～±)。

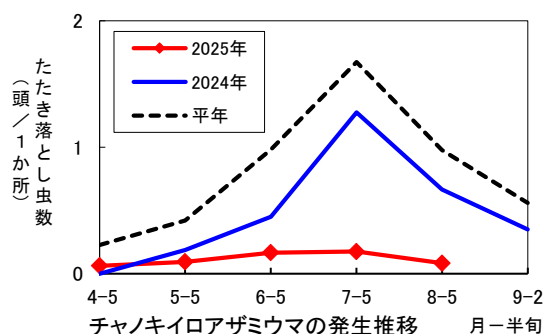
たたき落とし虫数 0.08 頭(平年 0.98 頭、前年 0.68 頭)

発生は場率 33.3% (平年 48.9%、前年 50.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

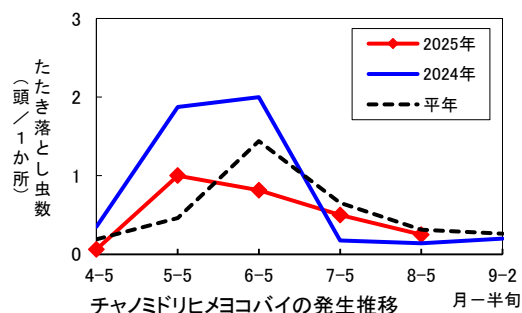
たたき落とし虫数 0.25 頭(平年 0.31 頭、前年 0.14 頭)

発生は場率 44.4% (平年 37.8%、前年 20.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 二番茶期以降は成幼虫が混在するため、発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



8 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

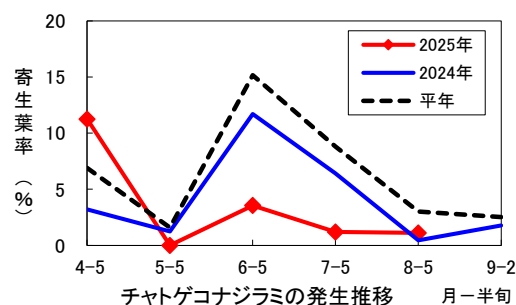
発生葉率 1.1% (平年 3.0%、前年 0.4%)

発生は場率 33.3% (平年 50.3%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫期である。このため、発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から14日後を目安に防除を行う。



イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。